



# 医歯薬学研究部だより

徳島大学大学院 医歯薬学研究部

Tokushima University  
Graduate School of Biomedical Sciences

Vol. 7  
2018年4月1日

## 巻頭言

1 大学院医歯薬学研究部長 苛原 稔

## 新分野紹介

2 地域循環器内科学分野  
特任教授 山田 博胤  
地域運動器・スポーツ医学分野  
特任教授(併任) 西良 浩一

## クラウドファンディング報告

3 脊椎関節機能再建外科学分野  
特任教授 松浦 哲也

## 旬の研究紹介

4 細胞生物学分野 教授 米村 重信  
消化器内科学分野 教授 高山 哲治

## 総合研究支援センターニュース

6 動物資源研究部門長 松本 高広

## 医療教育開発センターニュース

## AWAサポートセンターニュース

8 徳島大学AWAサポートセンター長 葉久 真理

## 「国際交流の夕べ」開催報告

9 大学院医歯薬学研究部長特別補佐(国際担当)  
医学部国際コーディネーター 村澤 普恵

## 第3回「モンゴル国日本モンゴル教育病院運営管理 及び医療サービス提供の体制確立プロジェクト」 現地報告会及び研修の報告

10 大学院医歯薬学研究部長特別補佐(国際担当)  
医学部国際コーディネーター 村澤 普恵

## 研究部公開シンポジウム開催報告

12 口腔顎顔面補綴学分野 教授 市川 哲雄

## 研究部市民公開講座開催報告

産科婦人科学分野 教授 苛原 稔

## 新任教授ご挨拶

13 脳神経外科学分野 教授 高木 康志  
医療情報学分野 教授 廣瀬 隼  
医用画像情報科学分野 教授 芳賀 昭弘  
脊椎関節機能再建外科学分野 特任教授 松浦 哲也  
歯周歯内治療学分野 教授 湯本 浩通  
地域循環器内科学分野 特任教授 山田 博胤

## 退職教授等一覧

## 学会賞等受賞者紹介

## 学会情報

## 編集後記



## 巻頭言

## 教員組織としての医歯薬学研究部の使命

大学院医歯薬学研究部長

苛原 稔

平成 29 年 4 月から医歯薬学研究部（以下、研究部）の使命が大きく変わり、バーチャルな組織から実質的な教員組織となりました。すなわち、蔵本キャンパスの医学、歯学、薬学に所属する全ての教員は研究部に属することになりました。これは、大学本部が進めてきた教員組織と教育組織（学部・大学院教育部）の規則上の分離、いわゆる「教育・研究・教員」分離の一環であり、研究部の位置付けを明確にしたものです。（ちなみに、常三島キャンパスの教員は社会産業理工学研究部に所属）。

教員組織としての研究部には、便宜上、4 学域（医学域（医学部医学科・医科栄養学科）、歯学域（歯学部）、薬学域（薬学部）、保健学域（医学部保健学科））に分かれています。一方、教育組織については学生が基本的な構成員であり、学部教育として医学部、歯学部、薬学部の 3 学部、大学院教育として医科学、口腔科学、薬科学、栄養生命科学、保健科学の 5 教育部が存在することは変わりません。研究部の教員は、必要に応じて、所属の学域に限らず、医学、歯学、薬学のどこに行っても授業を行うことができるようになります。

一方、管理組織ですが、研究部には各学域の代表者で構成する研究部教授会（代議員制）が設置され、研究部の人事案件と財務案件を審議することになります。しかし、教育関係（例えば進級や卒業認定、学位審査など）は今までどおり学部・教育部の教授会での審議になります。

今回の改革の意味は大きく 2 つ考えられます。運営交付金の減少に伴い、人件費と運営費の削減は不可欠の状態となり、予算圧縮のため人事削減を行うことが必須です。研究部は、研究部組織の現状を睨み将来を考えながら円滑にそれを進める責任部局となったということです。また、研究部がヘルスバイオサイエンス研究部として発足して約 14 年が経過し、実質的な医歯薬学の統合の仕上げを行うことでもあります。

研究部においては、大学を創設する気持ちで全ての事項を見直したいと考えています。今までの固定観念をもう一度検討し、発想の転換を図り、大胆な機構改革を断行し、無駄を省き筋肉質な体制を作らねばならない時期が来たと思います。今できなければ多分将来もできない、今やらなければいつやるのかを問われていると思います。

教員人事では、今までのようにポストを安易に継続するという考えは通用しません。必要な分野、将来に期待できる分野に集中した人事配置を考える必要があります。全ての分野を精査し、統合できるものは学部・教育部の垣根を越えて統合し、新設する分野は大胆に新設して、学生の期待に沿える体制を整備すべきです。基礎医学教育については、医歯薬学の基本として 3 学部 5 教育部に共通する教育内容は共同して行うべきです。臨床系については分野や診療科の再編を病院とともに考える必要があります。このようにして研究部内での連携・再編を進めたいと思います。

研究については、自立的研究推進が基本となるでしょう。公的研究費の獲得や学長が進めるクラウドファンディングなど、自己による研究資金の増加を図り、各々が各々の力量で研究を活発にする必要があります。もちろん、大学組織的には、研究部（先端酵素学研究所を含む）の研究経費の選択と集中、研究クラスターチームの発展的拡張とレベルアップを図り、さらには研究部と先端酵素学研究所の垣根を超えた機能的な編成替えを行うことも視野に入れる必要があります。

いずれにしても、教育・研究に特徴ある教員を採用することが重要と考えています。皆さんの協力とご支援を期待します。

## 寄附講座『地域循環器内科学分野』紹介

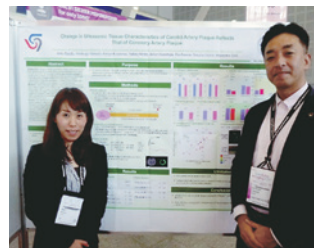
地域循環器内科学分野 特任教授 山田 博胤

この度、高松市からの寄附により地域循環器内科学分野が設置されました。これに伴い、昨年11月1日付けで私が特任教授を、12月1日付けで坂東美佳先生が特任助教を任命いたしました(写真1)。当分野が設置された目的は、高松市民病院において循環器疾患の診療を行って地域の医療に貢献すること、本学において循環器病学の研究及び教育を推進することです。当面は、水曜日に山田が、それ以外の曜日は坂東が高松市民病院で診療を行い、それ以外は両名とも本学で診療、研究、教育に従事します。

高松市民病院は、施設の老朽化、医師の高齢化、医師不足などが深刻で、患者数が減少し、極度の経営不振に陥りました。このような中で、本年秋に新築移転する予定で、「高松市立みんなの病院」として再出発することになりました(写真2)。これを契機に、徳島大学の各分野から医師スタッフの派遣が増え、救急搬送件数や入院患者数も増加してきており、病院全体が活気を取り戻しつつあります。現在の高松市民病院では、急性冠症候群や手術を要するような重症緊急患者こそ対応できませんが、心不全、高血圧緊急症、弁膜症、心筋症、不整脈疾患など幅広い循環器疾患の治療が行えます。これらの疾患

の病態把握には私たちが得意とする心エコー図検査が必須であることから、ひとりでも多くの患者の健康に貢献したい所存です。また、心不全の亜急性期から慢性期までのケアをサポートし、高度急性期病院と診療所・介護施設・在宅との間を取り持つ仕事ができないか模索中です。研究面では、本学の循環器内科や超音波センターと連携しながら、超音波医学の発展に貢献できるよう、世界に発信できるエビデンスを構築していきたいと思っております。

高松市民病院は、大学病院と比べて各診療科間の連携のハードルが低いことが強みです。今後も先生方のお力添えをいただきながら、地域の医療、そして医学の発展に貢献してまいります。



(写真1)  
左から：坂東特任助教、山田特任教授



(写真2)  
高松市立みんなの病院

## 寄附講座『地域運動器・スポーツ医学分野』紹介

地域運動器・スポーツ医学分野 特任教授(併任) 西良 浩一

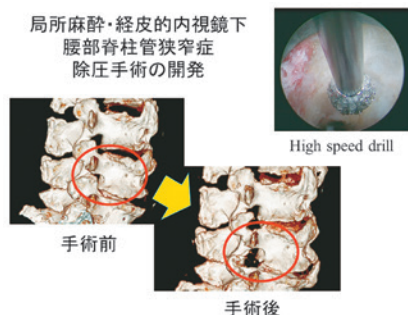
整形外科診療は、小児から高齢者におけるすべての運動器の疾患をカバーします。現在、高齢化の進む徳島県の地域で問題となっているのは、高齢者の骨粗しょう症を基盤としたロコモティブシンドローム及び発育期青少年少女のスポーツ障害です。地域運動器・スポーツ医学分野では、吉野川医療センターを中心とし、本学との連携により、県西部におけるこれら運動器疾患治療の診断と高度専門治療を行うとともに、これからの運動器治療の専門家である整形外科医師育成のための基幹センターとしても機能します。

現在、私と山下特任助教が腰痛を中心とした脊椎治療を、米津特任准教授が骨粗しょう症及び関節疾患治療を、岩目特任助教がスポーツ医学を担当しており、吉野川医療センターと本学において最先端運動器治療を実践しております。特に、内

視鏡や関節鏡を積極的に活用し、体にやさしい手術治療を実現しております。また、研究面では、骨量・骨質と体組成の関連、筋量との関連性に加え、姿勢の問題を解明しています。いつまでも若々しい姿勢で自分の足で歩き、寝たきりとならない運動器アンチエイジング治療を開発しております。

高齢者ロコモティブシンドロームの代表的疾患である腰部脊柱管狭窄症については、本学病院は局所麻酔による内視鏡治療を行っている日本で唯一の大学病院です。更なる安全性と適応拡大を目指し、臨床研究や基礎研究を進めております(写真1)。

発育期スポーツの代表障害である野球肘やサッカーでの膝障害に関しては、超音波機器を使い、フィールドにて早期発見・早期治療を行っております(写真2)。



(写真1)



(写真2)



## クラウドファンディング報告

■ 脊椎関節機能再建外科学分野 特任教授 松浦 哲也

### 野球界の未来を拓く子どもたちのために 少年野球選手のひじ障害を防ぎたい!

徳島大学が推進するクラウドファンディング(Crowdfunding:以下CF)に挑戦し目標を達成したので報告します。まだCF自体が周知されていないと思うので、簡単にCFについて説明します。CFは一般的には中小企業などが新製品を開発・販売する際や新サービスを提供する際にインターネットを利用して資金集めをするものです。大学で行うCFは、研究者の研究や大学・学生の取り組みを社会に認知してもらい、多くの方々の共感を得て事業費を支援していただくものです。徳島大学では平成28年度初頭から研究者がCFに挑戦を始めました。

「少年野球肘」は整形外科教室の研究テーマのひとつであり、毎年実際の大会現場に出向いて検診活動を行ってきました。検診を通じて得られた疫学調査の結果、診断法の確立、治療の体系化や予防法の提言は一定の評価を得て、社会貢献活動としても広く認識されるようになりました。ただ検診はすでに発生した障害の早期発見と早期治療を目的とした「二次予防」であり、障害の発生そのものを予防する「一次予防」ではありません。今後は一次予防策を提示し、その実行を可能とする環境作りに注力したいと考えています。こうした臨床現場に直結した研究の研究費を確保するには、関連

学会の助成金に応募する方法がありますが、必ずしも獲得できるものではありません。受益者負担の観点からも実際野球に関与している関係者の方々の共感を得て研究を展開するのが健全だと考え、CFに挑戦することにしました。

CFを実際に行う際、事務作業や情報発信での負担が懸念されますが、徳島大学が平成28年の11月に独自開発したICTプラットフォーム「おつくる

(<https://otsucle.jp/cf/>)からの支援が得られます。「おつくる」は一般社団法人大学支援機構が運営しており、私のCFでも事前協議からプロジェクト作成、情報発信や支援者との連絡調整など大変お世話になりました。

私のCFは資金応募期間が平成29年10月26日から12月25日までの2か月、目標金額50万円で挑戦しました。また、CFには目標額に達しなければ研究費を一切入手できない「達成型」と達しなくても入手できる「オールイン型」があり、オールイン型を選択しました。これは、研究内容が一定額に達しなくても実行可能であることが理由です。最終的には、55の団体・個人から目標額の207%に相当する103万6千円の支援をいただきました。学内からもご支援をいただき深謝申し上げます。

CFは研究費獲得が目標ですが、大学内で行っている研究内容を一般の方々に分かりやすく理解していただく「プロモーション」の役割もあります。現在、臨床研究は様々な面で実行が難しくなっています。今後は以前にも増して社会からの共感を得ることが必要であり、CFは良い手段になりうると期待できます。さらに今回のような事業内容であれば、大学の使命のひとつである「社会貢献・地域貢献」にも寄与できます。興味を持たれた方は、一度「おつくる」に連絡されることをお勧めします。

(088-656-9854、<https://otsucle.jp/cf/start/>)

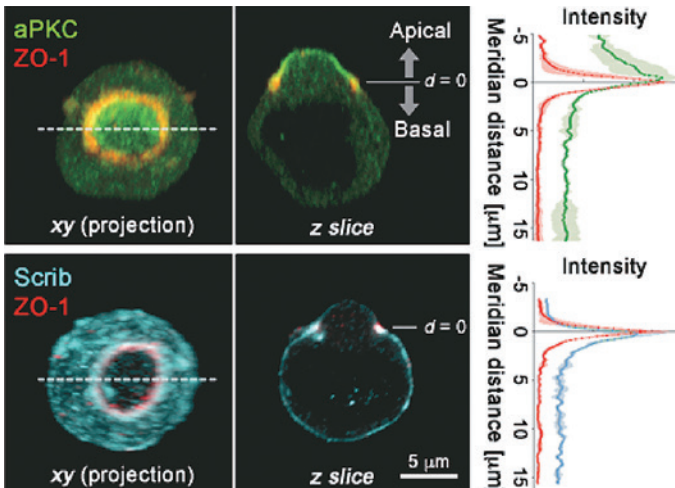


私たち細胞生物学分野では細胞レベルから多細胞レベルの現象を分子から理解しようとしています。具体的な細胞としては接着してシートを作る上皮細胞を扱っています。上皮シートは適切な形態形成を行って様々な形の器官になります。細胞間接着装置は上皮細胞を結合している分子複合体で、特に力のかかる形態形成ではアドヘレンスジャンクション(AJ: カドヘリンを接着分子とし、アクチン細胞骨格と結合している)が、細胞間に力を伝える役割を担います。

R2/7という細胞はAJの重要なタンパクである $\alpha$ -カテニンを欠失しており、AJ並びに上皮シートを形成できない、上皮としては役に立たない細胞です。私たちはこのR2/7細胞に変異 $\alpha$ -カテニンを導入することで、 $\alpha$ -カテニンの新しい重要な機能、すなわち、引っ張られると構造を変え、結合相手との結合力が増強する、それによって引っ張りに耐えられるようにAJを補強することを見出しました(Nat Cell Biol, 2010)。その後形態形成への役割を解析しつつ、共同研究を通じて $\alpha$ -カテニンの力学特性なども調べ、1分子レベルでの理解を深めつつあります(Sci Rep 2016)。

このR2/7細胞は $\alpha$ -カテニンを導入する入れ物の細胞として使用していたのですが、よく見ると、非常に変わっています。上皮細胞には外側内側というような(apical, basal)極性があり、例えば消化管では上皮細胞は内腔に面したapical面から栄養を吸収し、それを逆のbasolateral面から血管へと放出します。その機能に伴い、タンパク、脂質、細胞内構造にも偏りが見られます。その極性は上皮をしっかりとつないでいる細胞間接着装置と密接であると考えられてきましたが、このR2/7では接着装置を作れないのにきちんと上皮極性を示します。上皮極性も線虫の胚などで詳細な研究のある一般的な細胞極性に関わる遺伝子が重要であると思われていますが、実際に

上皮シートにおいてそれらの遺伝子の機能をなくしても大きな変化が出ないことが多いのでした。しかし、このR2/7では多くの極性因子の機能低下に敏感で、apical面の領域が大きく形態変化することがわかりました。また、

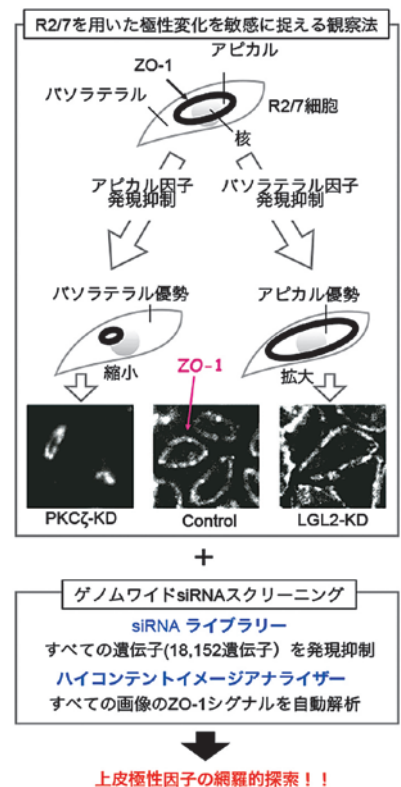


浮遊培養でも極性がきちんと見られ、基底膜などは存在しなくても、自律的に極性を形成することも見えてきました。通常の上皮シートでは基質に接着する側が必ずbasal側となるので、自律的な極性形成に気づくことはできませんでした。

上皮としては役に立たない細胞ですが、むしろその特質を利用して、面白いアイデアが湧いてきます。

自律的な上皮極性がどのようなメカニズムでできるのか、極性因子の分布の定量解析から数理的にも理解したいです。その極性因子の細胞膜直下の分布は極から単純に拡散するとは思えない、そのapicalとbasalとの境界の濃度が高いう、簡単には理解しにくいものであることがわかり、数理学者との共同研究をしつつありますが、シミュレーションからの理解、それを裏付ける実験に持っていきたいところです。

また、R2/7は極性因子の攪乱に感受性が高いことから、網羅的RNAiスクリーニングの系を立ち上げて解析を始めています。シートを作る上皮細胞では全く報告がないのは、変化が見づらく非常に困難だからでしょう。これまでは極性に影響する因子が一つ見つければ大きな成果でしたが、ゲノムワイドなスクリーニングによって生物がどのような戦略で多細胞生物の上皮極性を作り、維持しようとしているのかが見えてくることを期待しています。



上皮極性因子の網羅的探索！！



旬の  
研究紹介

「癌の分子イメージングと治療の研究」

■ 消化器内科学分野 教授 高山 哲治

消化器内科学分野では、癌や前癌病変に特異的発現する分子を標的とした分子イメージング研究と治療への応用を行なっております。代表的なものとして、消化管間質腫瘍 (Gastrointestinal Stromal Tumor; GIST) や大腸の微小前癌病変である aberrant crypt foci (ACF) のイメージング研究を紹介させていただきます。

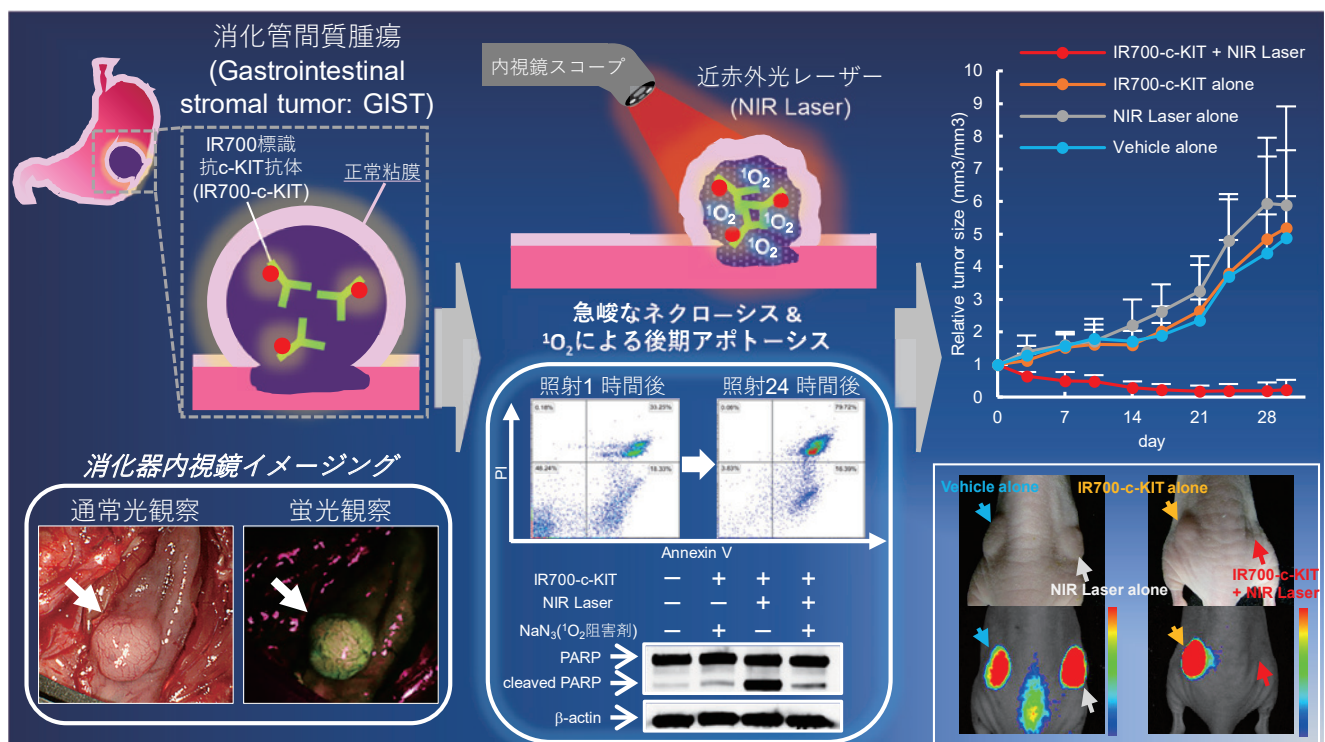
GIST は消化管に発生する粘膜下腫瘍の中で最も発生頻度の高い腫瘍であり、発見が遅れると肝転移や腹膜播種により死に至る病です。しかし、病変が粘膜下にあるため、内視鏡で発見してもなかなか診断がつけられません。一方、GIST の大部分が c-KIT を特異的に発現していますので、最終病理診断には c-KIT の免疫染色が行われます。そこで当教室では、c-KIT 抗体に近赤外線領域の蛍光光感受性物質である IR700 を標識し、まず in vitro、in vivo で分子イメージングを行いました。その結果、いずれも GIST に特異的な蛍光イメージが得ることができ、特にラットの同所移植モデルでは、下図のように正常粘膜を通して GIST の蛍光シグナルを確認することができました。

一方、最近、近赤外領域の光感受性物質 (IR700 など) を抗体に標識し、近赤外線を照射する事で細胞を死滅させる光免疫療法 (Photoimmunotherapy; PIT) が一部の癌で注

目されています。そこで我々は、GIST の皮下移植モデルマウスに IR700 標識 c-KIT 抗体を投与した後、近赤外線レーザーを照射したところ腫瘍は著明に縮小し、半数以上では完全に消失しました。さらに、PIT の作用機序は不明でしたが、GIST 細胞株を用いてその機序を調べたところ、急性ネクロシスと晩期アポトーシスの両者による事が明らかとなりました。現在、これをヒトに応用するために、ヒト化抗体の作成と近赤外領域の診断を可能性する内視鏡の開発に取り組んでおります。

このように、診断と治療を一緒に行う試みは Therapy と Diagnosis を合わせるとい意味で Theranostics (セラノステクス) として注目されており、我々の上記 GIST の研究も Theranostics という雑誌に掲載される予定です。

その他にも、大腸微小前癌病変 ACF に発現する Glutathione S-transferase- $\pi$  (GST- $\pi$ ) や Glucose transporter-1 (Glut-1) を標的とした分子イメージング、大腸腺腫の Epidermal growth factor receptor (EGFR) を標的としたイメージングや治療の研究も進んでおります。



# Center News ①

## 総合研究支援センターニュース

「Hope for the Best and Prepare for the Worst」

動物資源研究部門長 松本 高広

### 「転ばぬ先の杖」

動物資源研究部門では、平成 21 年からマウス胚生殖工学受託サービスを開始し、体外受精による SPF 化や凍結胚の作成・保存の支援をおこなっています(図 1)。現在(平成 30 年 1 月)までの利用成績は、体外受精が 251 件、凍結胚作成が 198 件、胚移植が 142 件を数え、今後益々の胚生殖工学支援のニーズが見込



図 1

まれております。また、学内唯一のマウスバンクとして、凍結胚 483 系統と凍結精子 410 系統が液体窒素タンクに保存されています。

昨今の生命科学研究における遺伝子組換えマウスの需要増大に伴い、動物実験施設では深刻な飼育スペースの不足に陥っています。こうしたねずみ算式に増えるネズミに対応するため、一旦不要となった系統は速やかに凍結胚にして、液体窒素下に保管しておくことが、研究コスト面でも、また飼育スペースの確保の点でも賢い研究術となります。また、凍結胚のストックがあれば、交配がうまくいかなかったり、感染が発生してしまったり、いつ起こるか分からない不測の事態に備えて、転ばぬ先の杖となるでしょう。

### 「天災は忘れた頃にやってくる」

地球上で発生している地震の約 15% が我が国で発生していると言われております。平成 28 年に震度 7 の熊本地震に見舞われた熊本大学生命資源研究・支援センター動物資源開発研究部門(CARD)においては、幸い早急なライフラインの復旧と現場スタッフの懸命の努力により、4 万 5 千匹のマウス、100 万個の凍結胚、3 万本の凍結精子が無事に守られました<sup>1</sup>。この復旧の際には、平成 23 年に発生した東日本大震災における東北大学動物実験施設報告書<sup>2</sup>に記された体験や教訓が非常に役に立ったそうです。

万が一にもこうした大震災に巻き込まれた場合、ライフラインが長期間にわたり停止するなどの最悪の事態を想定し、事前に防災対策を練っておくことが大切です。特に、液体窒素の供給が絶たれると、凍結胚のストックには致命的となるため、貴重なバイオリソースを守るための策を事前に講じておくことが研究者にとっての近々の課題です。

### 「備えあれば憂いなし」

国内にはナショナルバイオリソースプロジェクトとして大規模な拠点が形成されており、マウスでは理化学研究所バイオリソースセンター(BRC)、ラットでは京都大学大学院医学研究科附属動物実験施設がその代表機関となっています。加えて、上述の熊本大学 CARD や国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所などにもバイオリソースセンターが設置されており、研究者なら誰でも利用可能です。こうしたバイオリソース拠点を活用すれば、研究者が開発した動物の凍結胚や凍結精子を無償で作成し、我が国の生物資源として保存してくれるばかりか、他の研究者への提供作業の負担が大幅に軽減されるメリットがあります。一般的には譲渡と委託があり、譲渡の場合は知的財産権なども含めて移転することで、他の研究者がリソースを利用する自由度が増して、生命科学研究の発展への貢献を高めます。利用者がリソースを用いて得た成果については、提供者は知的財産権を主張しないこととなりますが、研究成果の公表にあたり、謝辞の表明や指定した論文の引用などの条件を付加することができます。一方、委託の場合は、リソースの諸権利の移転はせずに、系統の保存や配布などのリソース事業への利用を認めるものです。委託したリソースの提供を受ける利用者に対しては、予め各種の利用条件が設定できます。理研 BRC では災害時の備えとして、寄託されたリソースの一部を理研播磨キャンパスに設置されたバックアップ保存施設にも自動的に保存し、2 か所に分散保存する体制が整えられています。また、熊本大学 CARD では、データベースで外部への公開をせずに、研究者の預けた系統の胚、精子を凍結保存するサービスも有償で実施しており、研究者はそれぞれの用途に見合ったサービスを選択することができます。さらに、平成 24 年から、予期せぬ事故や災害などによる毀損や消失を回避するために、大学などにおける生物資源をバックアップするための体制として、大学連携バイオバックアッププロジェクト(IBBP)が愛知県岡崎市の基礎生物学研究所に立ち上がりました。IBBP の特徴としては、研究途中のリソースをバックアップすることができ、リソースに関する情報も厳密に秘密が保持され、他者への配布はおこなわれない点にあります。研究者は無料で利用ができ、基本的に 3 年間の保管の後、保管の延長申請も可能です。

遠くない未来に來ると想定される南海トラフ地震に備えて、貴重な生物資源は必ず地理的に離れた複数の箇所にバックアップしておくことが保険となります。バイオリソースセンターの利用方法の詳細は各ホームページをご覧ください(表 1)。皆さんのマウスもバンクへ、備えあれば憂いなし。

表 1 主要なバイオリソースセンター

施設名	所在地	URL
理化学研究所 BRC	茨城県つくば市	<a href="http://mus.brc.riken.jp/ja/order">http://mus.brc.riken.jp/ja/order</a>
京都大学大学院医学研究科附属動物実験施設	京都府京都市	<a href="http://www.anim.med.kyoto-u.ac.jp">http://www.anim.med.kyoto-u.ac.jp</a>
熊本大学 CARD	熊本県熊本市	<a href="http://card.medic.kumamoto-u.ac.jp/index.html">http://card.medic.kumamoto-u.ac.jp/index.html</a>
医薬基盤・健康・栄養研究所実験動物研究資源バンク	大阪府茨木市	<a href="https://animal.nibiohn.go.jp">https://animal.nibiohn.go.jp</a>
基礎生物学研究所 IBBPセンター	愛知県岡崎市	<a href="http://www.nibb.ac.jp/ibbp/">http://www.nibb.ac.jp/ibbp/</a>

1 熊本地震—熊本大学生命資源研究・支援センター

動物資源開発研究施設(CARD)報告書 平成28年10月

2 東日本大震災 東北大学動物実験施設報告書 平成24年3月



# Center News ②

## 医療教育開発センターニュース

### 取組紹介

#### ●組織横断型教育クラスターによる大学院教育支援

平成21年度より教育クラスターによる大学院教育が継続されており、「心・血管」、「肥満・糖尿病」、「感染・免疫」、「骨とCa」、「脳科学」、「発生・再生・遺伝」の6つのクラスター活動を支援しています。



#### ■クラスターコアセミナー:

6クラスター合わせて44回開催されました。  
(詳細:医療教育開発センターHP <http://www.hbs-edu.jp/index.html>)

#### ■ミニリトリート:

クラスター毎に企画、実施されています。

クラスター	日時	ミニリトリート参加人数(人)				
		院生	学部生	教職員	講師	計
心・血管	H29.10.22	12	1	10	1	24
感染・免疫	H30.2.28	15	5	40	1	61
肥満・糖尿病	H30.2.16	9	0	38	1	48
骨とCa	H30.2.24	4	2	16	1	23
脳科学	H30.2.19-20	11	3	13	1	28
発生・再生・遺伝	H30.3.1	6	1	9	—	16
合計		57	12	126	5	200

#### ●CV個別講習会

今年度は21回開催され、徳島大学病院、徳島県立中央病院、徳島市民病院、吉野川医療センター等の研修医91名が受講しました。中心静脈カテーテル(CV)挿入手技の安全性向上に役立っています。



#### ●高大連携高校生医学体験実習

将来のグローバルリーダー育成に向け高大連携の取組みが継続されています。今年も医療系学部への進学を目指す高校生がスキルス・ラボで医学体験実習(聴診・手洗い・採血・縫合・救急蘇生)を行いました。



平成29年8月9-10日(水・木)徳島県高校生医学体験実習66名  
平成29年12月16日(土)徳島県立城東高等学校2年生24名  
平成29年12月25日(月)徳島市立高校1年生39名

### スキルス・ラボからのご案内

#### ◆新規購入シミュレーター



鼻腔・咽頭拭い液モデル 装着型摘便シミュレーター NKSコロンモデル

◆医学部臨床A棟2階に外科的技を学ぶラボとしてスキルス・ラボ3が整備されました。

#### ●第11回チーム医療入門～蔵本地区1年生合同WS～ 「医療の視点から考える国際貢献とは」

医療人を目指す学生が相互理解を深め、将来円滑なチーム医療を行える基盤形成を目的として、蔵本地区の1年生全員を対象とした「SIH道場～アクティブラーニング入門」が毎年開催されています。



日時:平成29年9月29日(金)13:00-17:00  
場所:蔵本キャンパス大塚講堂大ホール (ほか)  
演題:「医療の視点から考える国際貢献とは」  
講師:内藤毅先生(徳島大学国際センター 特任教授)  
参加人数:430名(医学部、歯学部、薬学部1年生の98%)

#### ●第5回学部連携PBLチュートリアル

1年生合同WSに続く専門職種連携教育として、患者シナリオを用いた学部連携PBLチュートリアル教育が行われました。医学科、医科栄養学科、歯学科、口腔保健学科学生は正課授業として、他は有志参加として合計253名が参加しました。事前に講習を受けたTA6名と有志教員10名がチューターを担当しました。



日時:1日目-平成29年11月22日(水) 9:00-12:00  
2日目-平成29年11月29日(水) 9:00-11:00



場所:大塚講堂、蔵本会館  
テーマ:在宅老々介護の支援

参加人数:医学科4年98名、医科栄養学科3年48名、歯学科4年43名、口腔保健学科3年15名、保健学科看護学専攻3年36名、保健学科検査技術学専攻4年3名、薬学部5年10名  
(実施後アンケート結果)

Q.医療チームを構成する多職種の役割と仕事の内容について理解することができた。

Q.自分の職種の専門性を活かしてグループワークに貢献できた。

Q.グループメンバーと共同して作業でき、意見の対立に適切に対応できた。

Q.自分が目指す医療職種の仕事内容、役割について新しい気づきがあった。

■全くそう思う ■ そう思う ■ どちらともいえない ■ そう思わない ■ 全くそう思わない

#### ●第5,6回チーム医療臨床実習

複数の医療系学部学科の学生が共同で、受け持ち患者の実際の治療やケアについてカンファレンスを行いました。



##### 《第5回チーム医療臨床実習》

日時:平成29年10月4日(水) 15:00~16:30  
場所:西病棟6階 呼吸器・膠原病内科 多目的室  
参加者:医学科5年6名、医科栄養学科3年3名、教員4名

##### 《第6回チーム医療臨床実習》

日時:平成29年10月25日(水) 15:00~16:30  
場所:西病棟6階 呼吸器・膠原病内科 多目的室  
参加者:医学科5年6名、保健学科看護学専攻4年8名、薬学部5年2名、教員6名

#### ●第6回模擬患者参加型教育検討会

模擬患者参加型教育においてご協力いただいた模擬患者さんとともに今年度の活動について振り返りました。ご協力に対して模擬患者さんに感謝状が贈呈されました。



日時:平成30年3月7日(水) 17:00~  
場所:日亜メディカルホール  
参加人数:模擬患者17名、教職員26名

# Center News ③

## AWAサポートセンターニュース

### 女性活躍推進と社会の調和に向けて

■ 徳島大学AWAサポートセンター長

葉久 真理

平成 29 年もあっという間に過ぎ、平成 30 年の新しい年が始まりました。

平成 22 年 10 月に AWA サポートセンターを開設して、8 年目に入ります。AWA サポートセンターでは、仕事と出産・育児・介護などの両立に配慮した支援、女性研究者の業績等向上に向けた支援、女性研究者在職比率・採用比率の増加、上位職への登用など『女性研究者活躍推進』に向けて取り組んでまいりました。これらの取り組みは、大学としての取り組みによる所はもちろんのこと、以下の事業により整備・拡充し今日に至っております。

まず、科学技術人材育成費補助事業、女性研究者支援モデル育成「徳島大学 AWA (OUR) サポートシステム (H22 ～ H24)」では、女性のライフイベントと仕事との調和を図るための環境整備の基盤を構築し、女性研究者研究活動支援事業(連携型)「四国 5 大学連携による女性研究者活躍推進コンソーシアム形成事業 (H26 ～ H28)」では、四国 5 大学や関連企業等と連携して、女性研究者の研究力向上と上位職への登用を推し進めました。また、「徳島県女性医療従事者支援事業 (H26 ～ H28)」では、女性医療従事者の確保と活躍に向けて取り組みました。

この間、初代センター長本仲純子先生、二代目センター長山内あい子先生(元・医薬品情報学分野教授)に舵取りをいただき、玉置俊晃先生(元・薬理学分野教授)にも長年センター運営に携わっていただきました。平成 30 年 3 月でご定年を迎えられました山内あい子先生、玉置俊晃先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

昨年度には、「男女共同参画推進のための学び・キャリア

形成支援事業(文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課)」の、『女性の学びを通じた社会参画のための保育環境整備とキャリア形成支援の一体的な取組推進に係る実証的な調査』と、『女性の学び支援のための研究協議会の開催』の 2 つの委託を受けました。“女性が子育てをしながら学びやすい環境整備と女性がリカレント教育を活用して復職・再就職しやすい環境整備の在り方、女性の学びとキャリア形成・再就職支援を一体的に行う仕組みづくり”に向けて、四国 5 大学並びに連携企業等の持ち得る力を結集して取り組んでおります。これまでの助成は、女性研究者支援・育成事業であり、女性研究者に限定されていたことを改めてご理解いただきたいと思います。

なお、平成 29 年度からは、女性研究者に限定していた事業などの対象を拡大しております。少子高齢・人口減少社会の中で、多様な人材の能力を活用するための環境整備に、引き続きご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

#### ■ 主な事業報告

- H29. 8.28(月) 介護セミナー 2017
- H29. 9.26(火) キャリア支援セミナー 2017
- H29.11.27(月) 女性の学び講座Ⅰ：四国 5 大学連携メンター研修
- H29.12.12(火) 女性の学び講座Ⅱ：メディカルサイエンス系の英文の読解・ライティング
- H29.12.18(月) 女性の学び講座Ⅲ：仕事と生活の両立 四国発信! 男女の働き方改革 男性の育児推進セミナー
- H30. 1.16(火) 女性の学び講座Ⅳ：データ解析セミナー～臨床研究を紐解く統計学～
- H30. 1.21(日) 理系女子♡コラボ未来プロジェクト～徳島大学×大阪大学工学研究科×阿南高専～
- H30. 1.23(火) 女性の学び講座Ⅴ：女性リーダー研修
- H30. 2. 6(火) 女性の学び講座Ⅵ：メディカル系英文ライティング
- H29. 4. 8. 12 春・夏・冬休み Kids Club(幼児・学童一時預かり保育)



夏休み Kids Club



四国発信! 男女の働き方改革  
及び男性の育児推進セミナー



データ解析セミナー



理系女子♡コラボ未来プロジェクト



## 平成29年度 「蔵本地区 国際交流の夕べ」を開催しました

■ 大学院医歯薬学研究部長特別補佐（国際担当） 医学部国際コーディネーター 村澤 普惠

『医歯薬学研究部だより』第7号が皆さんのお手元に届く頃には、4月入学の新留学生が、「日本」の「徳島」という海外の地で、期待に胸を膨らませて新しい生活を始めていることでしょう。平成30年1月1日現在、徳島大学には26カ国269名の留学生が在籍し、うち13か国53名が蔵本地区で勉学に励んでいます。

蔵本地区では、平成17年から毎年12月に、母国を遠く離れて徳島に暮らす留学生とその家族を対象に、留学生同士、また日本人学生や教員とも交流を深め、研究の成果ばかりではなく、徳島での楽しい思い出を笑顔で母国に持ち帰ってもらうことを目的として、「蔵本地区国際交流の夕べ」（以下「交流会」（医歯薬学研究部主催））を開催しています。14回目となる交流会は、平成29年12月5日（火）、キッチンSAKU-LA（蔵本地区 蔵本会館1階）で開催され、蔵本地区に学ぶ13か国（タイ、バングラデシュ、ベトナム、中国、インドネシア、モンゴル、フィンランド、オランダ、シリア、アルゼンチン、アメリカ、インド、韓国）の留学生とその家族、教員、日本人学生合わせて93名が参加しました。ここ数年は、グローバル化を意識し、英語でのコミュニケーションに関心を持つ日本人学生が本交流会に参加し、留学生と積極的に交流をしています。

交流会は、勢井宏義医学部長補佐（統合生理学分野教授）の開会のご挨拶で始まり、参加者はSAKU-LA心づくしの料理と、苛原稔医歯薬学研究部長から差し入れられた飲み物などをいただきながら歓談しました。宴もたけなわ

となつたころ、参加者によるプレゼンテーションやパフォーマンスが行われました。まずは、シリア人留学生のAshtar Mohannadさん（大学院口腔科学教育部）が、スライドを使って、シリア最大の都市であるアレppoについて紹介した後、医学部の学術交流協定校であるメトロポリア応用科学大学（フィンランド）からの交換留学生Taru RusanenさんとSini Kivelaさん（医学部保健学科看護学専攻）が、フィンランドの紹介をしました。その後、日本人学生のダンスサークル「Copy Cat」がKポップに合わせてダンスを披露し、参加者を楽しませました。また最後に、プレゼント争奪ジャンケン大会が行われ、留学生も日本人も国籍を超えて大いに盛り上がりました。

蔵本地区の留学生のほとんどは大学院博士課程に在籍し、日々勉強や研究に明け暮れています。限られた環境の中で生活することが多い留学生の皆さんにとって、本交流会は、日本人学生や他の分野の先生方と交流できる貴重な機会です。また、徳島大学を起点にグローバルに活躍できる人材を育成する環境づくりが求められている本学においても、日本人学生が、本交流会に参加することにより、留学生と英語による交流をとおして様々な異文化に触れ、グローバルな意識を醸成することが期待できます。

参加してくださった皆さん、発表してくださった皆さん、交流会を盛り上げてくださってありがとうございました。今年1年笑顔で過ごし、また12月に元気にお会いして、交流の輪を広げましょう。Have a wonderful year!!



Taru RusanenさんとSini Kivelaさん（メトロポリア応用科学大学）による「フィンランド紹介」



プレゼンテーションを熱心に聴く参加者



プレゼント争奪ジャンケン大会で盛り上がる参加者



ダンスサークル「Copy Cat」によるダンス



参加者の記念撮影



## 第3回「モンゴル国日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェクト」現地报告会及び研修の報告

■ 大学院医歯薬学研究部長特別補佐（国際担当） 医学部国際コーディネーター 村澤 普惠

平成30年1月28日（日）から2月2日（金）の間モンゴル国において、「モンゴル国日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェクト」の报告会と現地研修を行いました。徳島大学では、昨年2月から愛媛大学と共同でJICAより本プロジェクトを受託し、モンゴル初の教育病院（以下「日モ病院」）への支援を行っています。このたびは、本プロジェクトが開始されて1年となる1月末に現地でプロジェクトの成果について报告会を開催するとともに、モンゴル側の本プロジェクト関係者への研修を行いました。

報告会は、1月30日（火）に、モンゴル国教育省、財務省、保健省、世界保健機構のご来賓ご出席のもと、JICAモンゴル事務所の佐藤睦所長、モンゴル国立医科大学のバト

バートル・グンチン学長と本プロジェクト関係者、そして徳島大学からは、苛原稔プロジェクト総括（大学院医歯薬学研究部長）をはじめとする計8名が、また愛媛大学から檜垣高史教授と他2名が出席して行われ、日本側とモンゴル側からそれぞれ、この1年間の研修成果や進捗状況が報告されました。

また研修では、各グループに分かれて、日モ病院の運営／財務管理、看護管理、感染対策について協議や意見交換をするるとともに、ガイドライン整備の進捗状況等についての確認を行いました。また、モンゴル国立医科大学から車で20分ほどのところに建設中の日モ病院建設現場の視察も行いました。

ところで、モンゴル滞在中の1月30日（火）、苛原研究



报告会



研修成果報告（西岡教授）



日モ病院建設現場



グンチン学長（左）から名誉教授の称号を授与される苛原研究部長



任命証とメダル



苛原研究部長と愛媛大学の檜垣教授（前列左から2人目）を囲んで記念撮影  
前列右は西野名誉教授



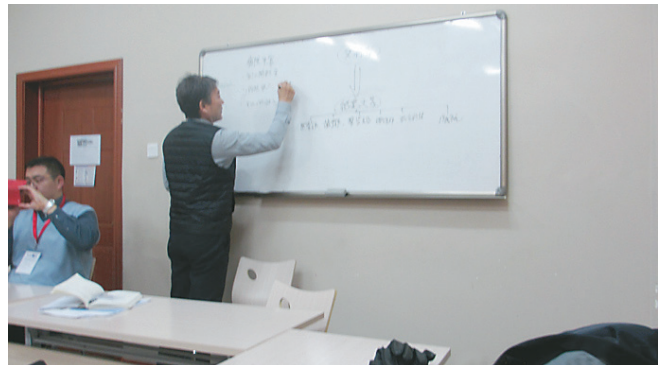
部長が、愛媛大学の榎垣教授（愛媛大学大学院医学系研究科医学専攻地域小児・周産期学講座）とともに、モンゴル国立医科大学から「名誉教授」の称号を授与されました。今回の称号授与は、平成17年に徳島大学とモンゴル国立医科大学間で学術交流協定を締結して以来、長きにわたる両校間の交流の実績と、60名近いモンゴル人留学生の大学院博士課程への受け入れ、そしてJICAの日モ病院プロジェクトでの貢献を高く評価していただいたものです。モンゴル国立医科大学では、これまでに58名に「名誉教授」の称号を授与し、その内38名が外国籍の方ということです。

このたびは、これまでもモンゴルとの交流に多大な貢献をされている西野瑞穂名誉教授（徳島大学並びにモンゴル国立医科大学）もモンゴルを訪問されました。西野先生には、顧問として本プロジェクトにご参加いただいておりますが、西野先生は、現在JICAの「草の根技術協力事業」で「モンゴル国乳幼児のむし歯予防」プロジェクトを進めており、モンゴルの歯科医療の向上に貢献していらっしゃいます。西野先生は、モンゴル国立医科大学から平成20年に「名誉教授」の称号を授与されており、またその後、モンゴル国から「モンゴル国小児友好メダル」、「モンゴル民主革命メダル」も授与されています。

話が少し変わりますが、現在モンゴル国では、JICAによる「モンゴル国における一次及び二次レベル医療施設従事者のための卒後研修強化プロジェクト」が実施されています。このプロジェクトの一環として、1月30日（火）と31日（水）の2日間、モンゴル国保健省で「総合診療医育成のためのカリキュラム開発セミナー」が開催され、本学の赤池雅史教授（医療教育学分野）が指導者の一人として招聘され、モンゴルの医療従事者に対してカリキュラム作成のワークショップを行いました。また、このプロジェクトは、今後日モ病院プロジェクトとも連携を図ることが見込まれるため、苛原研究部長もセミナーに参加し、日モ病院プロジェクトについて説明をし、日モ病院の今後の展望について講演しました。



グループに分かれての研修



記念撮影（研修最終日）



赤池教授（左から5人目）（総合診療医育成のためのカリキュラム開発セミナー）



ワークショップ（総合診療医育成のためのカリキュラム開発セミナー）



## 研究部公開シンポジウム開催報告

■ 口腔顎顔面補綴学分野 教授 市川 哲雄

平成 29 年度の研究部公開シンポジウムは、日本学術会議の公開講演会との共催で「地域共生社会実現に向けての大学と地域の取り組み」と題して歯学域の担当で開催しました。

まず、日本の老年学の第一人者で、千葉県柏市、神奈川県鎌倉市などで長寿社会の町作りを実践されている東京大学高齢社会総合研究機構特任教授、日本学術会議元副会長の秋山弘子先生に「産官学民による人生 100 年時代のまちづくり」と題して基調講演をしていただき、超高齢社会における大学の役割、取り組み方、手法を示していただきました。

そのあとに、シンポジウム「超高齢社会における地方大学の役割と学術形成」として、佐々木卓也先生（研究担当理事、生化学分野教授）、吉田敦也先生（地域創生センター

長）、白山靖彦先生（地域医療福祉学分野教授）に、それぞれの立場から地域活性化の中核的拠点を標榜している本学の試みや活動について報告していただくとともに、地方大学の学術形成の役割と問題点を議論しました。

重要でありつつ難解なテーマでしたが、学内外約 100 名の参加者を得て、非常に有意義な議論ができたという声も多く、成功裡に終了いたしました。

なお、日本学術会議は内閣府の所掌の唯一法律で認められた科学者アカデミーで、210 名の会員と約 2,000 名の連携会員からなる組織です。本研究部では、香美祥二先生（小児科学分野教授）、安友康二先生（生体防御医学分野教授）、西岡安彦先生（呼吸器・膠原病内科学分野教授）、石丸直澄先生（口腔分子病態学分野教授）、松山美和先生（口腔機能管理学分野教授）が連携会員で、市川が会員になっております。



## 研究部市民公開講座開催報告

■ 産科婦人科学分野 教授 苛原 稔

11月11日（土）14時から16時30分までの日程で、JR ホテルクレメント徳島 4 階にて、本研究部の市民公開講座を開催しました。

平成 29 年度は医科学部門の担当であり、私が第 27 回日本乳癌検診学会を徳島市で主催するのに併せて開催することを企画しました。幸いなことに、徳島県と徳島大学 AWA サポートセンターの共催で毎年開催している若い女性のためのライフプランニング講演会としても開催できることになり、ライフプランニングにおける健康維持の意義を若い女性に伝える講演会として開催することになりました。

そこで、テーマを「女性のためのライフプランニング講座～ヘルスケアと乳がん検診～」として、若い女性が将来のライフプランを考える際に参考となるように、健康と病気についての必要な知識を学習してもらえるようなプログラムとしました。

当日は、3名の演者の講演と質疑応答を行いました。まず私が、女性がキャリア形成を行う時期に考える必要のあ

る産婦人科的ヘルスケアの話題、特に、妊娠分娩に関連する病気について話題提供しました。続いて、医学部長の丹黒章教授から、若年女性に増加している乳がん診療の最近のトピックスに触れ、乳がん検診の重要性をわかりやすく説明していただきました。最後に、招請講演者であるタレントの麻木久仁子氏から、自分の人生の選択と乳がん罹患経験をベースに、いろいろなステージでの女性のライフプランニングの重要性と健康への留意を話していただきました。ご自分の体験から話されるので説得力のある素晴らしい講演でした。

200名の子で会場を準備しましたが、大学生の方々を中心に満杯となり、立ち見も多く、主催者としてとても嬉しい悲鳴となりました。また、丹黒教授のお嬢さんで山口放送アナウンサーの丹黒香奈子氏に司会をお願いし、素晴らしい進行をしていただきました。

最後になりましたが、開催にご支援賜りました本学をはじめ多くの御関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。



## 新任教授ご挨拶



● 脳神経外科学分野 教授 高木 康志

平成29年10月1日付けで脳神経外科学分野の教授を拝命いたしました。私は平成3年に京都大学を卒業後、脳血管障害の臨床と脳虚血の研究を中心にやってまいりました。手術に関しては頭蓋底腫瘍などの脳腫瘍も数多く手がけてきました。本学の脳神経外科には、永廣信治病院長のリーダーシップの下で脳卒中センターをコアに発展してきた実績があります。また、研究分野も脳動脈瘤の基礎研究を中心に非常に強力です。本分野をさらに発展させるために力を尽くしたいと思っております。徳島は落ち着いた、暮らしやすい街でこれからが非常に楽しみです。今後とも御指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



● 医療情報学分野 教授 廣瀬 隼

平成29年10月1日付けで医療情報学分野教授を拝命致しました。私は熊本出身で、熊本大学卒業後は整形外科医として主に関節外科の診療に従事してきました。一方で、平成21年から熊本大学病院医療情報経営企画部に所属し、病院情報システムの管理と運用業務を行いながら、熊本県全域の医療情報連携事業にも携わってきました。これまでの経験を活かして、徳島大学病院の病院情報システム更新と運用、徳島県全域医療介護連携ネットワーク「阿波あいネット」の発展に貢献したいと考えています。また、AIなどの最新技術を活用した医療情報の解析や、それらの有効活用に関する教育および研究が充実できるよう、職務に精進していく所存ですので、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



● 医用画像情報科学分野 教授 芳賀 昭弘

平成29年10月1日付けで医用画像情報科学分野教授を拝命いたしました。私は今から10年前に東京大学医学系研究科の医学物理教育に携わったことがきっかけで、研究のフィールドを基礎物理学から医学領域に移しました。とは言っても、データからパターンを見つけ出す作業は物理学分野で行ってきたこととさほど変わりがなく、むしろ医学のフィールドを知ることで物理学の面白さや役割の大きさをより強く実感するようになりました。放射線科学教育においても、物理学や数学の基礎が今後益々大事になっていくものと思っております。学生が多様なキャリアを築いていけるようしっかりと土台作り貢献していきたいと考えています。ご指導・ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



● 脊椎関節機能再建外科学分野 特任教授 松浦 哲也

平成29年10月1日付けで脊椎関節機能再建外科学分野の特任教授を拝命いたしました。私は平成5年に本学を卒業後、整形外科に入局いたしました。整形外科では関節を中心に臨床・研究・教育に従事してきました。特にスポーツの外傷・障害に興味があり、スポーツ整形外科のメッカである米国のピッツバーグ大学にも2年間留学しました。これまで取り組んできた成長期スポーツ障害の病因・病態解明、治療法の体系化および予防に関する研究を一層深めていく所存です。また、学生・研修医の教育にも目を向けたいと思います。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



● 歯周歯内治療学分野 教授 湯本 浩通

平成29年10月1日付けで、歯周歯内治療学分野教授を担当させていただくことになりました。私は平成4年に徳島大学歯学部を卒業後、同大学院歯学研究科へ進学し、平成14年からボストン大学医学部へ3年間留学しました。これまで、主に細菌感染・宿主免疫、特に口腔感染症と全身疾患との関連について研究を行ってまいりました。口腔の2大疾患である歯周病と齲蝕も細菌感染に起因する疾患で、近年、口腔感染症と全身疾患との関連性が示され、歯科医師の医学・医療における役割も益々大きくなっています。今後も歯周病をはじめとする口腔感染症の病態解明などの基礎研究に加えて、疾患の予防・診断・治療に関する臨床研究をより発展させたいと考えております。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。



● 地域循環器内科学分野 特任教授 山田 博胤

平成29年11月1日付けで、地域循環器内科学分野の特任教授を拝命いたしました。私は鳴門市で生まれ、平成6年に徳島大学を卒業後、徳島大学医学部附属病院第二内科に入局しました。その後、米国クリーブランドクリニックに3年半留学した以外は、ほとんど徳島大学に在籍し、循環器内科学の中でも心エコー図学を専門として、教育、研究、診療に従事しました。

今回、高松市からの寄附により当分野が新設され、私と特任助教1名が交替で高松市民病院における循環器診療を行っています。高松市民病院は、平成30年9月に新築移転して「高松市立みんなの病院」として再出発いたします。微力ではありますが、病院再建の一助となれますよう努力する所存ですので、今後ともお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

## 退職教授等 一覧

● 医学域	玉置 俊晃	教授	(薬理学分野)	H30.3.31	定年退職
	土井 俊夫	教授	(腎臓内科学分野)	H30.3.31	定年退職
	坂下 直実	教授	(病態病理学分野)	H30.3.31	退職
	井本 逸勢	教授	(人類遺伝学分野)	H30.3.31	退職
	西村 匡司	教授	(救急集中治療医学分野)	H30.3.31	退職
● 薬学域	山内 あい子	教授	(医薬品情報学分野)	H30.3.31	定年退職
● 事務部	秋山 靖夫	事務部長	(蔵本事務部)	H30.3.31	定年退職

## 学会賞等受賞者紹介



### 第21回日本病態栄養学会年次学術集会若手研究独創賞

【疾患治療栄養学分野・大学院生】  
●平成30年1月14日  
●頭頸部癌患者において24時間尿中クレアチニン排泄量は骨格筋量評価に有用か

久保みゆ



### 第21回日本病態栄養学会年次学術集会若手研究独創賞

【疾患治療栄養学分野・大学院生】  
●平成30年1月14日  
●Nutrition Support Team(NST)介入患者におけるObesity Paradoxの存在

名山千咲子



### 日本農芸化学会中四国支部奨励賞(学生部門)

【食品機能学分野・大学院生】  
●平成30年1月22日  
●日本農芸化学会中四国支部奨励賞(学生部門)

福田泰士



### 日本薬学会中国四国支部奨励賞

【薬品製造化学分野・助教】  
●平成29年8月25日  
●ペプチドへの直接的な不斉反応を基盤とした非天然アミノ酸含有ペプチドの新規効率的合成法開発

猪熊翼



### The 26th DDS Conference Postdoctoral Presentation Award 2017

【衛生薬学分野・助教】  
●平成29年9月1日  
●リソソームDDS製剤と血栓溶解剤併用による新規脳梗塞治療法の開発

福田達也



### 第55回日本人工臓器学会大会大会賞 優秀賞

【生体材料工学分野・講師】  
●平成29年9月2日  
●メカノケミカル手法による早期硬化性CPCセメントの生体内環境での硬化性の評価

関根一光



### China-Japan-Korea Symposium on Analytical Chemistry 2017 Symposium Award for Outstanding Presentation

【分析科学分野・大学院生】  
●平成29年9月10日  
●High throughput titration by feedback-based flow ratiometry and its application to analysis of vinegar samples

柿内直哉



### 第16回情報科学技術フォーラムFIT奨励賞

【技術支援部蔵本技術部門・副技術部門長】  
●平成29年9月14日  
●アカデミックプラットフォームを目指した研究支援ネットワークシステムの開発と評価

北池秀次



### 日本宇宙生物科学会第31回大会優秀発表賞

【生体栄養学分野・助教】  
●平成29年9月22日  
●無重力による酸化ストレスを介した筋細胞のシグナルトランスダクション

内田貴之



### 2017 Biennial Joint Congress of CPS-JPS-KAP ポスター賞

【口腔顎顔面補綴学分野・教授】  
●平成29年10月19日~21日  
●A comparison of the occlusal force-sustaining ability of natural and dental implant patients during a sensory integration task

市川哲雄



### 日本血液学会奨励賞

【組織再生制御学分野・助教】  
●平成29年10月20日  
●TAK-1 inhibition disrupts Pim-2-associated and Pim-2-independent key signaling pathways to effectively suppress tumor growth and restore bone formation in myeloma

寺町順平



### 第76回日本矯正歯科学会学術大会 優秀発表賞

【口腔顎顔面矯正学分野・大学院生】  
●平成29年10月20日  
●Role of hypoxia inducible factor-1 $\alpha$  in the palatal wound healing

Islamy R Hutami



### 第76回日本矯正歯科学会学術大会 優秀発表賞

【口腔顎顔面矯正学分野・大学院生】  
●平成29年10月20日  
●CRISPR/Casシステムを用いたMx1遺伝子各ドメインの形態形成における機能検証

荒井大志



### 平成29年度日本薬学会化学系薬学部会賞

【機能分子合成薬学分野・講師】  
●平成29年11月6日  
●アミド結合切断反応を基盤とした生命科学指向型ツールの開発

重永章



### 第54回ペプチド討論会ポスター賞

【機能分子合成薬学分野・大学院生】  
●平成29年11月21日  
●Development of methodology for producing thioesters from naturally occurring peptide sequences

小宮千明



### 未来博士3分間コンペティション 優秀賞

【顎機能咬合再建学分野・大学院生】  
●平成29年11月25日  
●Functional tooth regeneration using bioengineering technology

Yuehui Zhang



### 日本歯周病学会60周年記念京都大会 最優秀ポスター賞

【歯周歯内治療学分野・助教】  
●平成29年12月17日  
●歯列不正を伴う重度薬物性歯肉増殖症患者に対して包括的歯周治療を行った一症例

二宮雅美



## 学会情報

### 第3回日本血管不全学会学術集会・総会

会長：佐田 政隆  
開催日：平成30年4月14日(土)  
会場：京都大学医学部創立百周年記念施設「芝蘭会館」  
問合せ先：循環器内科学分野  
TEL:088-633-7851 FAX:088-633-7894

### 第118回日本内科学会四国地方会

会長：西岡 安彦  
開催日：平成30年6月3日(日)  
会場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)  
問合せ先：呼吸器・膠原病内科学分野  
TEL:088-633-7127 FAX:088-633-2134

### 第23回一般社団法人日本口腔顔面痛学会

会長：松香 芳三  
開催日：平成30年7月7日(土)~8日(日)  
会場：北九州国際会議場  
問合せ先：顎機能咬合再建学分野  
TEL:088-633-7350 FAX:088-633-7391

### 第257回徳島医学会学術集会

会長：丹黒 章  
開催日：平成30年8月5日(日)  
会場：徳島県医師会館  
問合せ先：徳島医学会事務局  
TEL:088-633-7104 FAX:088-633-7115

### 第10回日本静脈経腸栄養学会四国支部会学術集会

会長：濱田 康弘  
開催日：平成30年9月1日(土)  
会場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)  
問合せ先：第10回日本静脈経腸栄養学会四国支部会学術集会運営事務局  
TEL:06-6372-3050 FAX:06-6376-2362  
E-MAIL:jspen-sh10@intergroup.co.jp

### 平成30年度公益社団法人日本補綴歯科学会中国・四国支部学術大会

会長：佐藤 修斎  
開催日：平成30年9月1日(土)~9月2日(日)  
会場：徳島大学大塚講堂  
問合せ先：口腔顎顔面補綴学分野  
TEL:088-633-7347 FAX:088-633-7461  
E-MAIL:hotetsu1@tokushima-u.ac.jp

### 第3回日本下肢救済・足病学会中国四国地方会学術集会

会長：橋本 一郎  
開催日：平成30年9月16日(日)  
会場：阿波観光ホテル  
問合せ先：形成外科学分野  
TEL:088-633-7296 FAX:088-633-7297

### 第22回日本臨床内分泌病理学会学術総会

会長：吉本 勝彦  
開催日：平成30年9月21日(金)~9月22日(土)  
会場：徳島大学大塚講堂小ホール  
問合せ先：分子薬理学分野  
TEL:088-633-9137 FAX:088-633-7331

### 第48回日本腎臓学会西部学術大会

会長：香美 祥二  
開催日：平成30年9月28日(金)~29日(土)  
会場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)  
問合せ先：小児科学分野  
TEL:088-633-7135

### 編集後記

平成31年度からWilleyの電子ジャーナルパッケージ契約が中止される。本学の研究・教育を取り巻く環境は年々厳しくなる一方であるが、今後も多数の受賞者を引き続き輩出できるよう、研究部で協力して蔵本キャンパスの研究・教育の発展に尽力したいものである。(難波康祐)